

### 平成19年度文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」採択の意義

研究科長(平成18～19年度) 西村 美彦  
研究科長(平成20年度～) 二村 久則

国際開発研究科は、平成19年度の文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」公募に際し「国際協力型発信能力の育成 高度国際人育成のための実践プログラム」を課題として申請し、平成19年9月に採択された。これは平成17年度の「魅力ある大学院教育」イニシアティブ採択に続く快挙である。さらに平成17年度は国際開発専攻および国際協力専攻の2専攻での申請と採択だったが、今回は国際コミュニケーション専攻も加えた研究科全体での採択であり、研究科内の教育的統合の前進を形で示したことになる。以下に申請課題の概要と採択後の進捗状況を述べる。

本研究科では博士後期課程の制度整備が本年度の課題となっていた。このため5月に行われた「大学院教育改革支援プログラム」への申請にあたって、計画書作成チームは博士後期課程の人材養成目的を明確にしたうえ、博士前・後期課程一貫した「教育ロードマップ」の作成、および後期課程用国際実習科目の設置を計画した。

本研究科の教育目標は「自立的研究・実務能力」および「異文化理解に立脚した国際性」を兼ね備えた人材の育成だが、博士後期課程ではこれに加えて、世界水準の大学や研究機関、ならびに国際機関で活躍できる人材としての「高度国際人」の養成を目的に据えた。そして「高度国際人」が備えるべき能力として「国際協力型発信能力」、すなわち、途上国などの現場で生起する多様な問題を掘り上げ、国際的なアカデミズムの場で提起する能力と、現場の地方行政官や住民とコミュニケーションをとりながら問題解決する能力とを合わせ持つことを明示した。

博士前・後期課程一貫した「教育ロードマップ」の作成、および後期課程用国際実習科目の設置は、採択後の10月より作業を開始した。「教育ロードマップ」は、学生が必要な能力と経験を身につけつつ年限内に博士学位を取得するために効果的な手順を示して実践させることを目的とし、20年度明示を目指して作成中である。

博士後期課程において現場主義的实践教育を担う国際的な実習科目(グローバル・プラクティカム)は、平成19・20年度の試行を経て21年度の本格的設置を予定している。「グローバル・プラクティカム」は、「国際協力型発信能力」を構成する3つの能力、すなわち 問題発掘型研究能力、創造的コミュニケーション能力、そして 実践的マ

ネジメント能力の練磨のために、それぞれ対応した次の3種類の実習で構成される。

問題発掘型海外実地研究:学生が国際的研究に主体的に関わる能力を修得する。1～2ヶ月間、学術交流協定校等の大学教員あるいは実務家から指導を受けつつ共同研究・調査を実施し、その成果を国際的な学会・研究会等の場で口頭発表したうえ、英文を中心とした外国語の論文として公刊する。

Eラーニング・コンテンツ(教材)開発と国際教育実習:教育能力の育成を目指す実習であり、ひろくは創造的コミュニケーション能力を養う。学生が、学術交流協定校等において教育実習を行い、その教育内容と教授方法を基に、広く世界に向けて提供できるEラーニング・コンテンツを作成する。

国際実務研修:実践的マネジメント能力を養う。海外国際機関、国内国際援助機関等で国際インターンシップに従事して実務能力を身につけつつ、本研究科で修得した理論の現場への適用可能性を検証して報告書にまとめる。

現在本研究科では、平成20年1月着任の本プログラム特任助教を加えて制度整備を進めている。上に述べた「グローバル・プラクティカム」実施のために、既に引率教員2名と学生18名が派遣された。今後も3専攻が協力して本プログラムを押し進め、世界に羽ばたく「高度国際人」を送り出す教育体制づくりに努力してゆくつもりである。

本プログラムの詳細については、下記URLをご参照頂きたい。  
[http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/curriculum/global\\_practicum/](http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/curriculum/global_practicum/)



滝沢教授及び大学院生による大連東軟情報学院(中国遼寧省大連市)での海外実地研究

## 海外実地研修

## OFW 2007 in Cambodia

海外実地研修委員会  
委員長 北村 友人

国際開発研究科(GSID)では、学生が教員とともに発展途上国の現場を訪れ、現地調査の研修を受ける「海外実地研修」(Overseas Fieldwork: OFW)をカリキュラムの一環として実施してきた。このOFWは、理論と実践の間を架橋することを目指すGSIDの方向性を象徴する教育プログラムであると言えるだろう。16回目を迎えた今年度の研修は、GSIDの学术交流協定校である王立プノンペン大学(Royal University of Phnom Penh: RUPP)の協力を得て、カンボジアのカンボン・チュナン州で実施した。過去2年間のOFWもカンボジアで実施しており、3度目となる今回のOFWでも、RUPPとの協力関係をさらに深めることができたと思う。参加者は、GSIDから学生24名、引率教員5名、RUPPからは教員4名、学生8名であった。8月5日から18日までの日程のうち、8月5日から16日までカンボン・チュナン州に滞在し、帰国前の2日間を首都プノンペンでの調査活動などにあてた。

今年度の研修では、テーマ別に4つのワーキング・グループ(WG)を立ち上げ、スラ・タメイ・コミュン(Srae Thmei Commune)コミュンとは村(village)の次に大きな行政単位で、複数の村によって構成されている]のなかの村々に分かれて調査を行った。各WGの内訳は、次の通りである。WG1は、「農村インフラストラクチャー」をテーマに、農村部における道路整備の問題について調査を行った。WG2は、「貿易と商業」をテーマとして、米、パーム糖、陶器といった産品別に調査を実施した。WG3のテーマは「教育」であり、中等教育段階における中途退学の問題について調査した。WG4は「文化」をテーマに、陶器作りの中に見られる伝統文化の継承について調査を行った。カンボン・チュナンは、農業とともに陶器作りでも有名な土地であり、それが今年度の研修のテーマにも反映されていると言えるだろう。具体的な調査の成果については年度末に刊行する報告書をご覧いただきたいが、各WGが精力的に調査を進めるなかで、チームで調査を行うことの面白さと難しさを実感していたように見受けられた。

カンボン・チュナン州からプノンペンへの移動の途上では、17世紀から19世紀にかけて王都が置かれていた古都ウドンに

立ち寄る機会を得た。ウドンでは、丘陵のうえに建設された仏教寺院の遺跡を見学したが、1970年代にクメール・ルージュの砲撃によって破壊された幾多の建造物も、数年前に改修が一通り終わったことで、見事な姿を見せていた。丘のうえからはカンボジアの緑広がる大地を見渡すことができ、悲しい歴史のなかにも逞しく生き抜いてきたカンボジアの人々の暮らしについて、改めて思いを馳せることができた貴重な機会であった。こうした多少感傷的な思いも、2週間弱の農村訪問のなかで多くのカンボジアの方々とお会いし、さまざまな話を伺うことができたからこそ、生まれてきたものであろう。

今年度の研修は、RUPPの教員・学生をはじめ、カンボン・チュナン州の関係各位、そして何よりも調査で訪れた村の人々から、多大なご支援とご理解をいただくことによって、実り多い滞在とすることができた。ここに記して感謝の意を表したい。また、とくに3年連続のOFWとなり、RUPPの教員の方々にはご負担となってきた面も多々あるのではないかと推察されるが、こうした継続的な学术交流を実現するなかで、GSIDとRUPPの信頼関係をさらに深めることができた強く感じている。

なお、今年度のOFW委員会は、準備期間ならびに現地調査において廣里恭史教授が委員長を務められた。しかし、ご都合によりOFWから帰国後の8月末にGSIDをご退職され、アジア開発銀行へとお移りになられた。その後任として北村が委員長職を引き継いだ次第だが、廣里先生のご尽力なしに今年度のOFWの成功を語るわけにはいかないことを、最後に申し添えておきたい。

## ● ● ● 現地調査日程 ● ● ●

月 日	活 動 内 容
8 / 5 (日)	名古屋 バンコク経由 プノンペン(タイ航空)
8 / 6 (月)	プノンペン カンボンチュナン移動(大型バス) RUPP教員・学生との交流会 カンボンチュナン州知事表敬訪問
8 / 7 (火) 8 / 13 (月)	ワーキング・グループ別の調査(7日間)
8 / 14 (火)	調査地での調査結果報告会、GSID主催のお別れ会
8 / 15 (水)	カンボンチュナン ウドン訪問 プノンペン (大型バスでの移動)
8 / 16 (木)	ワーキング・グループ別の関係省庁訪問
8 / 17 (金)	夜 プノンペン バンコク 名古屋(タイ航空)



## 海外実地研修に参加して

### Working Group 1: Rural Infrastructure

Group Leader LIU Jing

Learning by doing is one of the most important processes in study. OFW gave us a precious opportunity to conduct research by using what we have learned at school, and it is also a good chance for us to experience the gap between theory and reality.

Rural infrastructure was taken as a new theme for OFW this year. After group discussion, we decided to focus on the cooperation on irrigation maintenance between Commune Council (CC), Village Development Committee (VDC) and our villagers. But according to information that we got from our advisor, agriculture was not the main industry in the field where we were going to. It was really a shock for all members. After another round of discussion and information collection, we reached an agreement to focus on the maintenance of village to village roads in the field-work. We also made a hypothesis that there was cooperation for maintenance of village to village roads between CC, VDC and villagers.

Our OFW started from mapping the village. However, it was another shock that we had to change our questionnaire based on the mapping result. Facing this unexpected problem, our members united in revising the questionnaire even without sleeping. By using semi-structured interviews, we collected data in two groups. Although we used the same questionnaire, it was still difficult to analyze the data since our ways of asking questions were different. This was one lesson that we learned from OFW. Another

lesson that we learned was how to use interpreters to ask questions and how to understand the answers translated by them.

The research result showed that CC was not very involved in road maintenance, but played an indirect role in road maintenance. Compared to this, the main actors were VDC and villagers who worked on the ground in road maintenance. Moreover, we also found some problems including overloading, unequal contact between villagers and VDC, and lack of laterite for road maintenance.

Apart from the academic results, we also enjoyed the benefits through our teamwork and cooperation before, during and after the OFW. The time that we shared with each other will be remembered by all members in this group.

Finally, on behalf of all members of this group, I would like to express our gratitude to our advisors and the professors and students from RUPP for their tremendous support. Without their assistance, our OFW would not have been achieved.



Members of Working Group1



Group discussion

### Working Group 2: Trade & Commerce

グループ・リーダー 石川 晃士

Working Group 2はカンボジアの農産物・生產品の商業流通に関心を持ち、日本、中国、カンボジア、ブラジルと多国籍の学生により構成されたグループである。カンボジアの農産物・生產品の商業流通という幅広いテーマにつき、どのような視点から調査をするのかという方法論から、私たちのグループ研究は始まった。

千思万考の末、最終的に私たちは“農村における農産物、生產品の商業流通をどのように向上させ、生産者の収入を増加させるのか”というテーマを定め、調査地域の村民の多くは稲作、パーム糖、Clay-pot製造という3つの収入源により生計を立てていると仮定し、それらの生産・流通状況を調査することとした。しかし、事前準備段階では生産物選別に関する正確なデータがあったわけではなく、果たして本当に3つの収入源に分けられるのかは、最後まで不安要素であった。

現地調査では、同じ形式の質問表を3つの生產品の様式に合わせて作り、それを片手に農村に入った。対象地区の村長の計らいにより、私たちの仮定した3つの主要產品につきそれぞれ農家を紹介してもらうことができたため、当初の不安要素は解消できる形となり、質問表の大幅な変更もなく、調査は至って順調に行われた。私たちの一番の発見は稲作、パーム糖、Clay-potの生産者はいずれも組合の形態を取っておらず、商業面においてわずかな収入しか得ていないという点である。利益の多くを生產品の仲買人、稲作の場合は精米業者・仲買人に吸い取られている構造は、事前調査段階で予想していたものの、組合不在の流通システムは想像以上に農民の収入を低下させ、農民の生活に問題を生じさせているようだった。

そこで、調査結果より、私たちの各グループは分析の焦点を組合にあて、組合作りを提案することにした。調査の最終日に村での発表を行ったが、村長が私たちの提案内容である“組合作り”に同意してくれ、集まった村民に呼びかけてくれたことは、強く印象に残っている。私たちの調査が少しでも村に動機付けを与えられたのかもしれないという実感が調査でうれしかったことでもある。

様々な人の協力により達成できた今回の調査は、私たちにたくさんのことを教えてくれた。この場をお借りして、この活動に御尽力くださったGSIDの先生方、RUPPの学生、先生方、調査地域の村長、村民の方々、省庁関係者にお礼を申し上げたい。



Working Group2のメンバーたち



村民の前でのグループ発表

## Working Group 3: Education

Group Leader IM Keun

For human rights security, human capital, and economic development, education builds human capacity with critical thought, skilled labor, and innovative thinking for the country. Plus, to alleviate poverty and disparity to respond to globalization and regional integration trend, education for all (EFA) is vital. Education reform and policies are made to tackle educational disparity and inequality within the nation. Since the fieldwork was conducted in Cambodia, one of the stabilized developing countries to date, we targeted promoting educational enrollment and parity at school level. Our pre-research sector analysis led us to investigate perceptions among various stakeholders towards schooling at the lower secondary level. We focused on gaps among their perceptions and complex root causes of their rational.

We found a dilemma among parents and children towards schooling, deriving from several root causes, and the gaps among various actors. Complexity of related root causes leading to their decisions was found. Beyond this interesting result, we came up with additional conceptual framework to explain analysis and conclusion. Without data from fieldwork, these essences could not be revealed. Through PRA method, our group utilized semi-structured interview and was transitionally split into sub groups when interviewed. This supplied us with satisfactory results.

Personally, conducting such fieldwork in my country made me feel Cambodian and led me to see high advantage to join

such opportunity. Contexts and language advantage made me smoothly cooperate with the target local authorities and stakeholders. Opinions on flexibility and opportunity analysis were advanced through systematic group meeting. Mutual trust, patience, individual's value, and benefit sharing are crucial to make effective teamwork. I think this experience is vital since it equips students to become good independent or team researcher(s) in the future, no matter in what sort of research. Through the teamwork we learnt much, friendships were strengthened, and the image of the field and the time we spent are valuable memories.

Finally, we deeply appreciate our counterparts from Royal University of Phnom Penh (RUPP) for their great assistance, Dr. YUTO Kitamura, our group advisor, for his crucial advice and facilitation, and Mr. Shunsuke Kambayashi, our assistant. Without them, our research could not be done successfully.



At RUPP



Interview with school principal

## Working Group 4: Culture

Group Leader NET Seila

Just reading books and listening to professors' talks are not always the best ways to learn things. More importantly, it is useful to know the world besides our own. This was the reason I decided to join OFW 2007 launched by GSID, Nagoya University. I was a member of the culture group. We decided to research the current situation of pottery making culture of Cambodia, and our findings were fascinating. We found out that in spite of the effects of globalization, mainly through the introduction of new machines and methods, villagers still want to continue making their pottery by hand. However, because of the effect of globalization, Cambodian pottery can now be exported to Vietnam, Thailand and as far as the United States. Obviously, villagers are very good at preserving their tradition which has continued from generation to generation despite repeated wars and social unrest.

I also learnt much through the research process. Being ex-

posed to a different environment in which everyone was Japanese has taught me how to work in a group. It was not an easy task but very interesting; it was not only a matter of sharing ideas but also a matter of listening to other's ideas and synthesizing them. I also learned a great deal from the advisors, whose advice and facilitating roles were extremely important when our group faced difficulties. Of course, our research was not free from problems such as language barrier, imperfect and mismatched information, and the contradiction between research objectives and questions for interviews. Nonetheless, we did learn from these drawbacks, and we have done our best to make use of the information we got to write the report.

Our research would not have been possible without the valuable and constructive comments and interventions from our main advisors Professor Uchida, Professor Bunlay, and group advisor Mr. Penghuy. We always remember their enthusiastic help and support. We would also like to show gratitude to the Cambodian authorities of all levels who have been very helpful in providing guidance and information necessary for our fieldwork. We also express our thanks to our translators who helped us a lot and gave us ideas for a better result-oriented research.

Finally, we hope you will enjoy and learn a lot from OFW for the following years.



Giving a presentation of the result to the villagers



Our group members, advisors and village chief



## 国内実地研修

## 国内実地研修 (DFW) 2007

国内実地研修委員長  
西川 芳昭

国際開発研究科では、現場で活躍できる人材育成を目標として重視してきた実践教育の一環として、国内実地研修( Domestic Fieldwork、略称DFW )が共通科目に位置づけている。近年は海外実地研修( Overseas Fieldwork、略称OFW )との有機的連携も実践され、相互補完的に国内外のフィールドを学生に経験させる機会となっている。

今年度の国内実地研修を実施させていただいた清内路村は、長野県の南部、中央アルプス南部に位置し、面積約44km<sup>2</sup>、人口713人( 2007年11月30日現在 )の村である。日本の各地に存在する過疎の村の一つであるが、その規模や条件不利性においてほかの村と比べても非常に厳しい条件下におかれている。しかしながら、清内路村民とともにこれからの清内路を考えていく登録制の特別村民を全国から募る「清内路ビレッジ」事業や役場と村民の協働による村の活性化事業、さらには伝統作物「清内路あかね」を用いた焼酎などの加工品生産によって注目を浴びており、開発について学ぶ適切な場所と考えられた。

今年度の参加者は、日本人5名・留学生20名の合計25名であり、経済・行政・福祉・文化の4グループが設けられた。参加人数は昨年度よりも若干減少したが、留学生の比率が上がったことにより、国内のフィールドで異文化体験とグループ活動を行うという面からは難易度の高い実習となった。現地調査は、国内実地研修委員の東村先生、大名先生、鈴木先生に加え、藤川先生という強力な助っ人を得て10月23日から25日にかけて実施された。

今年度は全員の学生がホームステイを経験させていただき、また11月30日に村での中間報告会を行い、多くの機会を通して村の方たちと接することができた。一義的には教育目的の調査ではあるが、研修の受け入れに多大な犠牲を払ってくださった村の方々との親交が深まる経験をできたことは望外の喜びである。

なお、今回の調査にあたり、櫻井久江村長、村役場職員、教育・福祉・経済関係諸団体、村民各位、特にホームステイを受け入れて下さった皆様にたいへんお世話になった。深く感謝申し上げたい。



現地聞き取り調査の様子



集合写真

## DFW活動スケジュール

10月23日( 火 )

	午前 10:00 ~ 12:00	午後13:00 ~ 17:00
WG1	10:30-12:00 福祉センター	13:00-15:00 谷口醸造 15:00-17:00 村役場総務振興課 ( 観光・商工・農政 )
WG2	10:00-10:30 福祉センター	13:00-15:00 JA 15:00-17:00 村役場民生課
WG3	村役場 ご挨拶 10:30-12:00 福祉センター	13:00-15:00 村役場民生課 保健衛生係 15:00-17:00 村役場民生課 福祉係
WG4	10:30-12:00 福祉センター	13:15-15:00 小学校 授業参観 16:10-17:00 小学校 インタビュー

10月24日( 水 )

	午前 9:00 ~ 12:00	午後13:00 ~ 17:00
WG1	9:00-10:30 峠の本陣 10:45-12:00 役場	13:30-15:00 福祉センター 15:15-17:00 役場( 品評会 )
WG2	9:00-10:30 村長・助役 10:45-12:00 議長・副議長	13:30-17:00 福祉センター
WG3	8:30-12:00 福祉センター	13:30-17:00 デイサービスセンター
WG4	8:15-15:00 中学校	15:00-16:00 小学校 参観 16:10-17:00 福祉センター

10月25日( 木 )

	午前 9:00 ~ 12:00	午後13:00 ~ 15:00
WG1	9:00-10:30 喜久水酒造 11:00-12:00 長田屋商店	13:30-14:30 ふるさと自然園 14:30-15:00 役場( 挨拶 )
WG2	9:00-12:00 一般住民へのインタビュー	13:00-14:30 教育委員会 14:30-15:00 役場( 挨拶 )
WG3	9:00-12:00 一般住民へのインタビュー	13:00-14:30 診療所 14:30-15:00 役場( 挨拶 )
WG4	9:00-10:30 保育園 11:00-12:00 小学校	13:00-14:30 教育委員会 14:30-15:00 役場( 挨拶 )

## 結果報告会

項 目	詳 細
日 時	2007年11月30日( 金 ) 13:00-15:00
場 所	清内路村福祉センター会議室
出席者	櫻井久江村長をはじめ役場の方々や調査にご協力いただいたの方々
報告者	DFW参加者

## 新スタッフ紹介

准教授(国際開発専攻)

山田 肖子



2007年12月付けで国際開発専攻に着任しました。専門は、比較国際教育学で、主にアフリカで初中等教育について社会学的調査を行っています。

教育学部のたたき上げというのではなく、学部時代は法学部において、司法試験をうっかり受験したこともあります。学部卒業後は一貫して国際協力の仕事をしてきましたが、その中で、教育人材育成に特化していき、出張することが多かったアフリカを研究拠点とするようになりました。

GSIDの設立と私の最初の就職は同じ時期ですが、当時はまだ国際開発で大学院教育を受けるには海外に行かなければならない反面、学士でも、狭いながらもこの分野で就職する道が開かれていました。そういう意味では、今のGSIDの学生諸氏は、恵まれた環境で学べて羨ましいと同時に、随分早い段階で国際開発に携わろうという明確な意思を持っているのに驚きます。私は随分回り道をしてきましたが、国際協力にも、財団のプログラム・オフィサー、コンサルタント、研究者と、異なる立場から関わることで、いろいろな側面を知り、考える機会があったことは自分の現在の研究にも活きていると思います。

学部卒業以来、職も住まいも転々としてきたのに、実は国内では、広島に8ヶ月暮らした以外は、関東圏をずっとうろろろしていました。名古屋は、出張では何度も来ていますが、知らないことが多く、まずは見て歩き、食べ歩きをしたい...と旅行者気分も抜けない状態です。同時に、自分の足元の国内の問題を知らずに、アフリカの教育や開発を語ることは片手落ちですので、機会があったら、地域の社会ともいろいろ関わっていきたいです。

着任早々、GSIDに来てよかったと思うことのひとつは、ディシプリンや手法は違って、研究の関心領域が近い人や同じ地域を見ている人との交流が日常的にあることです。前職は、「研究助教授」という、かなり自分の研究に専念できるポストでしたが、自分の中にある問題意識や研究テーマを深く追求するには絶好の環境であったと同時に、違う視点を持つ人が集まって、個人を越えた新しい展開を生み出すということはあまりできていませんでした。今後は、いろいろな研究分野の方々と議論、意見交換の場を積極的に求め、研究の可能性を広げていければと思っています。

また、GSIDの学生は非常に熱心で、国際開発への真摯な思いが感じられ、教員としての自分も責任が重く感じています。至らないことも多いですが、楽しみつつ、一緒に成長していければと思います。

助教(情報担当)

大野 誠寛



2007年9月1日に情報担当助教として着任いたしました。コンピュータやネットワークの管理を担当しております。2003年3月に名古屋大学工学部電気電子・情報工学科を卒業し、2005年4月に同大学院情報科学研究科情報システム学専攻博士前期課程を、2007年7月に同博士後期課程を修了いたしました。つい数ヶ月前までは学生をしておりまして、まだまだ社会人として至らない点が多いかと思いますが、責任を持って頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。

実は私、学生の中からGSIDには何度か出入りしておりました。最初にGSIDに通うようになったのは修士1年のときです。当時の情報担当助手の方にアルバイトとして雇っていただきまして、GSIDのコンピュータやネットワークの設定をお手伝いしておりました。また、テレビ会議システムの技術補助を行うため、週に一度GSIDに足を運んでいたこともございました。このような御縁もあり、親しみを感じておりましたGSIDで働けることになり、大変うれしく思っております。

着任して以来、複雑なGSIDのコンピュータ・ネットワーク環境やさまざまなルール等を把握するのに四苦八苦の毎日で、あっという間に数ヶ月が経ちました。ようやく、GSIDのコンピュータ・ネットワークの全体像を把握しつつあり、皆様のお役に立てる機会も少しずつ増えてきているのではないかと実感しております。今後は、これまでに身につけた情報関連の知識をいかし、GSIDのコンピュータ・ネットワーク環境をより良いものにしていければと思っています。

最後に、私の専門は自然言語処理です。GSIDの皆様の中には聞き慣れない方もいらっしゃるかもしれません。自然言語処理とは、自然言語、すなわち人間が日常的に使っている言語をコンピュータに処理させることを研究する分野です。この中で、私は、話し言葉を対象にした音声言語処理システムの研究を行っております。これまでに、話し言葉に対して構文情報を付与したコーパスを構築し、日本語話し言葉の統計的構文解析器を開発しました。現在は、開発した構文解析器の応用として、リアルタイム字幕生成や音声データのコンテンツ化に関する研究を行っています。これらの研究を通じて、研究面においてもGSIDに貢献することができれば幸いです。





## 受賞紹介

### 国際理解教育プログラム(EIUP)が愛知県国際交流推進功労賞を受賞

EIUP14・15期代表  
山田 みの理

この度、国際開発研究科の院生が中心に活動を行っている国際理解教育プログラム(Education for International Understanding Program; EIUP)が、愛知県国際交流協会より国際交流推進功労賞(団体の部)を受賞しました。EIUPの7年間の国際理解教育活動が、公にその実績を認められたことを意味するもので大変光栄に思っております。

EIUPは2000年に国際開発研究科創立10周年記念事業として立ち上げられ、今年で8年目を迎えました。国際開発研究科では様々な文化的背景と経験を持つ大学院生が、国際的視野から開発・協力・交流について学んでいます。EIUPはこの特性を生かし、地域の国際化に貢献するために国際理解教育の出前講座を行っております。この出前講座(デリバリー)の目的は、児童・生徒が普段あまり接することのない大学院留学生と実際に交流することを通じ、身近な視点から国際理解を促すことです。具体的には、東海地区の小・中学校等に講師となる留学生とEIUPスタッフを派遣し、留学生の国の文化などに関するクイズや、その国のゲームなどを行い、異文化理解を促す場を提供します。

近年では、学習指導要領にも国際理解教育が総合的な学習の時間の一項目として取り上げられていますが、学校現場の先生方は実際にどのように授業を行ったら良いのか試行錯誤を繰り返されております。私たちEIUPは、そんな先生方と共に良い授業を児童・生徒に提供するために日々活動しています。留学生は自国に関して伝えたいことがたくさんあり、このような留学生とのコミュニケーションは、よ



受賞の記念撮影



授賞式の様子

り効果的に国際理解を促す授業をするうえで大変重要だと考えます。そのため、出前講座の内容は、EIUPスタッフが学校の先生と留学生との間に入って共に創っていきます。現在は児童・生徒が楽しみながら学べるようクイズやゲームを交えた活動が多いのですが、今後は一校へのデリバリー回数を増やすことによって、より深い内容を提供していきたいと考えています。今回このような賞を頂けたことをきっかけに、今後のデリバリーをより充実させていけるよう努力したいと思っております。

#### 国際理解教育プログラム(EIUP)事務局

国際開発研究科内 2階205号室

TEL/Fax: (052)789-5082

gsidieup@gsid.nagoya-u.ac.jp

URL: www.gsid.nagoya-u.ac.jp/eiup/index.html

## 院生活動紹介

### 『満洲愛国信濃村の生活 - 中国残留孤児達の家族史』を出版して

国際コミュニケーション専攻  
趙 彦民

思えば、昨年のいま頃(2006年11月)は、三重大学出版会が主催する第四回「日本修士論文賞」に応募した論文の審査結果を受け、日々論文の修正に追われていた。応募のきっかけとなったのは、昨年3月に経済学部図書室を利用したときのことだった。偶然図書室の掲示板に貼ってあった「日本修士論文賞」のポスターを見かけ、応募要項などを見たところ書類を簡単にそろえられそうだったので、応募要項に沿って修士論文の原稿を出版会に送った。原稿の提出から結果が出るまでの約8ヶ月の間に3回の審査を経て、12月12日に三重大学出版会から授賞の内定通知を受けた。12月23日の授賞式の当日に論文が本として出版されることも決まり、翌年の2007年8月に出版となった。

本書は、2003年度に本研究科に提出した学位論文をベースとし、主催側の審査結果に応じて大幅に加筆し、修正したものである。その内容は、長野県の中国残留日本人を対象としたフィールド調査のなかで出会った三人の残留孤児とそれらの家族へのライフヒストリー・インタビューを中心とし、中国残留日本人はどのような人たちで、いかに日中社会を生き抜いてきたかという彼らの「生きら

れた世界」を彼らの語りを通して明らかにしようとしたものである。本書は、満洲移民の歴史背景の説明にはじまり、最も多くの移民を送出した長野県が積極的に満洲へ移民を送り込んだ理由を究明したうえで、長野県から送り出された中和開拓団を事例として取り上げ、戦後の中国社会に取り残された残留孤児たちが日中両国の社会を生きてきた経験を綴った。

現在、構想している博士論文は、引き続き中和開拓団を研究対象とするが、調査対象者は残留孤児に限らず、集団引揚げ者、残留婦人らも視野に入れ、かつて満洲という共通の舞台で経験を共にした個々人が、戦後それぞれの人生を歩む中で満洲の経験を記憶としてどのように想起し、それをいかに語っているのか、異なる個々人の記憶や解釈をトータルで考察していこうと考えている。

振り返ってみれば、修士課程で書いたものがこのような形で世に出るということは、思いもよらなかった。応募から出版に至るまでの過程で多くのことを学ぶことができ、機会を与えて下さった三重大学出版会、これまで指導して下さいました先生方、共に勉強してきた学友の皆さんに、ここに記して感謝を申し上げたい。また、GSIDに在籍の皆さんにもこのような機会をとらえてぜひ応募することをお勧めしたい。



## TOPICS

## 国際シンポジウム「開発学の学際的構築をめざして」は何をめざしたか

科学研究費補助金共同研究 代表 木村 宏恒

2007年10月31日と11月1日の2日間、「貧困削減を例に」と副題をつけた表記のシンポジウムを本研究科で開催した。このシンポジウムは、同名の3年科研の締め会議であった。今回の科研は本研究科の教員間の研究交流を深めることを一つの目標としており、本研究科教員7人、提携大学(フィリピン大学ロスバニョス校とガジャマダ大学)から2人、総論と合わせて10本の報告を行った。それらはDiscussion Paper(英語、日本語)になっており、『国際開発研究フォーラム』でも特集を組む予定にしている。いずれも本研究科のホームページからdownloadできる。

今日、国際開発の世界は国連2000年決議「MDGs(21世紀開発目標)」を中心に動いているが、その基調は貧困削減であり、その政策は教育・保健に代表される社会開発項目である。それに対してわれわれの結論は、そのような貧困削減目標は対症療法であり、根治療法は経済成長であることを再確認せよというものである。経済成長の波及効果(trickle down)が貧困を解消させるのであり、経済成長が配分をより悪くした例はまず見られず、質の悪い成長というのは一般化できない。世界の貧困層が直面している問題は、質の悪い成長ではなく、成長がほとんどないことである、ということを再確認するものである。そこから導かれる政策の方向性は、経済成長を支援する政府政策のあり方(ガバナンス)の重要性であり、中小零細企業促進政策や農業振興政策・地域開発政策一般が、貧困削減重点項目である。

る小規模金融より貧困層の所得向上には重要であるということである。

その意味で国際開発は総合的なものである。国際開発研究科では「T字型」教育を基本方針としてきた(開発の各分野を総合的に知る横線と特定分野を深く知る縦線の組み合わせ)。しかしその横線は現状では各学問分野の縦線の集合体であって、文字通りの横線にはなっていない。たとえば開発における教育の重要性は誰も否定しないが、インドのケララ州が「高い人間開発と低い経済開発」と特徴づけられるように、教育を重視すれば経済成長がついてくるというものではない。各学問分野の総合的組み合わせ、途上国の状況に応じた重点分野の特定とその実施過程での諸問題などはなお今後の課題である。



ブノンベンの外資系企業女工住宅。  
月給はほとんど村の実家に送金



インドで被差別少数民族子弟の  
教育に携わるNGOを訪問

## スタッフの人事異動

## 教 員

平成19年8月22日 退職

国際開発専攻国際開発講座 教授  
廣里 恭史(アジア開発銀行へ)

平成19年9月1日 採用

国際コミュニケーション専攻 助教  
大野 誠寛

平成19年12月1日 採用

国際開発専攻国際開発講座 准教授  
山田 肖子(政策研究大学院大学から)

## 事 務

平成19年10月1日 転出

総務担当 福地 実(医学部・医学系研究科総務課へ)

平成19年10月1日 転入

総務担当 犬飼 尚樹(総務部人事労務課から)

## 客員研究員の紹介

## 外国人客員研究員

Dorji Gyaltshen

(ゾンガ開発委員会 言語開発専門研究員)

研究課題/ブータンで使われている言語である

ChoekayとDzongkhaの語彙に関する  
比較研究

期 間/平成20年1月10日~平成20年3月31日

## 研究科出版物の紹介

『国際開発研究フォーラム35』2007年8月31日発行

『国際開発研究フォーラム36』2008年3月発行予定

『国際開発研究フォーラム』掲載論文は、下記URLアドレスより全文閲覧可能です(21号以降)。  
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/>

